

右山者、洞谷山永光寺開山塔之後之通、隈北谷河、隈東越中境、隈西大路、其内寺寄之山者、依有志於洞谷山永光寺限、永代所奉寄進實也。萬一於子々孫々之中致違亂煩者、爲不孝仁可被行罪科者也。仍爲後證寄進之狀如件。

高田中務入道

應永十四年亥十一月十五日 沙彌道教 在判

進上 永光寺御侍衣禪師

【永光寺文書】

七三三

能登國洞谷山永光寺開山塔傳燈院之

後山榜在見彼事

右此山者、當年應永十四始而自高田中務入道方所奉寄進當寺也。然間直宗詔奉打渡之畢、仍軍勢甲乙人等不可致狼藉者也。若於背此旨輩者、異可有沙汰之狀如件。

應永十四年丁十一月十五日 沙彌彌 在判

應永十五年 戊子 紀元二〇六八

十月十日。幕府、加賀守護斯波滿種をして、山城臨川寺領加賀郡大野莊の諸公事以下を免除し、守護不入の地と爲さしむ。

【臨川寺重書案文】 山城

七三四

臨川寺雜掌申加賀國大野庄付得藏地頭諸公事・臨時課役・段錢并舟留檢斷等事、當所依爲嚴重舊領、役夫工米以下課役先々被免許畢、而近年寄綺於左右及譴責之間、先

應永九年可爲守護使不入地之旨被成御判、遵行之處、立歸動號舟留檢斷、使者入部未休云々。甚不可然。所詮重被成御判之上者、向後堅可被停止之由所被仰下也。仍執達如件。

應永十五年十月十日 興德寺殿 在判

應永十五年十月十日 沙彌彌 在判

左衛門佐入道殿

【天龍寺文書】 山城

七三五

臨川寺雜掌申加賀國大野庄付得藏地頭諸公事・臨時課

役・段錢・舟留等但於大野庄得藏村地者、不可有相違。次役夫工米以下課役可免除云々。次守護使不入之事。條々任被仰出之旨、可致其沙汰之狀如件。

應永十五年十一月廿日

(新渡瀧種) 在判

二宮信濃入道殿

(是より先足利義持が應永十五年十月五日附を以て、臨川寺并三會院領諸國所々公事・臨時課役・段錢・守護役等を免除したる御教書、天龍寺文書に在り)

十月十九日。足利義持、狩野茂重に、加賀郡若松莊の地頭職を還付す。

【狩野文書】

七三六

(足利義持) 御判

加賀國若松庄地頭職備後彦事、所返付狩野孫四郎入道善雄也。如元可令領知之狀如件。

應永十五年十月十九日

(狩野孫四郎入道善雄は應永五年六月八日の條に見えたる孫四郎茂重なり)

應永十六年

十月廿五日。鳳至郡總持寺五院の住持等、同寺内延壽堂領櫛比莊浦上の年貢の使途を定む。

【總持寺文書】 鳳至郡

七三七

延壽堂分田之事

合參百刈 在所浦上

右無外和尚与天徹和尚如御定別ニ爲延壽堂可被置者也。此年貢足者、毎日の堂司時分并病僧薪宛之。冬者日二束、春夏秋若有餘剩者納所方ニ置之、可有堂司寮修造敷。

應永拾五年十月廿五日

如意良受 在判
洞川梵玖 在判
妙高性禪 在判
傳法元三 在判

前惣持侷藉 在判

應永十六年 己丑 紀元二〇六九